

なんということなしに、読みそこなったまま今日の経ってしまふ本がある。大部だったり難解だったりして取りかかるとに決意が要求されるとか、その本がどこかに埋もれて行方不明とか、入手困難になったとかの明確な理由によって読まなかったのではない。

むしろ逆に、この本ならいつでも読めるのだから急いで手に取ることもあるまい、と考えているうちに次第に相手が遠ざかり、いつか忘れてしまふ運びとなる。それでいて何かの拍子にふと思出し、あれはまだ読んでいなかったな、とやささかの後ろめたさを覚えたりする。ではさすべ読む



黒井 千次

かというところではなく、やがて元の状態に戻ってま

「ブンナよ、木からおりてこい」（新潮文庫）がそのケースに当る。水上勉作品は読んで来たつもりだが、この一冊まで手が伸びなかった。重話ぶつ作であるために敬遠したのだった

重話とはいっても、これは緊張を強いられる凄惨な影を帯びた話である。新潮文庫の解説によれば、芝居と原作を比較した水上勉は「もっとシリアスに、原作どおりもっと陰気で動物のたろつものにする方法もあると思います」とある座

であったため、ブンナは土を掘って穴の中へ隠れたまま、藪が連んで来る傷ついた藪や百舌、鼠や蛇や牛がえるなどの恐怖や諦念や願望をつぶさに知らされる。絶対的強者の藪は最後まで羽音だけの存在だが、餌とされる小動物の間には体格

### 腐れ縁の本を読む

### 古いと共に変わる読み方

や体力によって相対的力関係が生れる。

た忘れられていく。しかし決してその相手と縁を切ったわけではなく、いわば腐れ縁とでもいった付かず離れずの関係がいつまでも続いている。誰でもそんな本の二冊や三冊は持っているのではあるまいか。

化され日本各地を巡回しているこの作が中国でも再演されることになったと知ったのを機会に、昨秋上演台本と原作とをまとめて読むことになった。ようやく真

正面から「ブンナ」に向き合って挨拶する感じだった。

談会で語っているという。餌が餌を食う事態も起りかねないのと同時に、死と生との連鎖の間から生命の再生の影が仄かに見え始める。若い読者には、若い頃とはまた違う静かな読み方があるのかもしれない、と考えてみたくなる。

(作家)

## 半歩遅れの読書術